山姥と記紀神話および縄文時代の宗教儀礼

吉田敦彦

キーワード　昔話、日本神話、縄文時代、地母神、作物起源神話、山姥、オホゲツヒメ、ウケモチ、食わず女房、姥皮、牛方山姥、天道さん金の鎖、土偶、土器、蛙文様。

要　旨　昔話の中で山姥は、自分の身体からさまざまな財宝などを排泄したり分泌していくらでも出せる、不思議な力をもち、また死ぬと死体からも、財宝や作物などが発生するように、物語られてきた。これは記紀に記された作物起源神話の主人公の神たちが、やはりさまざまな御馳走を、身体からいくらでも排泄したり分泌して出せた上に、死体から作物などが発生したと語られているのと似ている。殺されると死体から作物が生え出る、地母神的豊穣女神は、わが国で縄文時代の中期にはすでに信仰され、その姿を土偶や土器に表現されていた。昔話の中の山姥は、土偶や土器から窺えるこの縄文時代の地母神の性質を、さまざまな面でびっくりするほどよく受け継いでおり、古い女神が民間伝承の中で不気味な妖怪に変化したものと目せる。

目　次

(1)大便や乳として不思議なものを排出する山姥……51
(2)昔話「姥皮」の中の山姥……54
(3)死体からの財宝や作物の発生……62
(4)記紀神話および縄文時代の土偶や土器との符号……65

(1)大便や乳として不思議なものを排出する山姥

昔話蒐集の古典と目される『聴耳草紙』の中に、佐々木喜善によって収録された岩手県の昔話の一つに、山母（＝山姥）を主人公にする次のような、すこぶる興味深いと思える内容のものがある。(1)

ある山里に爺様と婆様があって、美しい娘を一人持っていた。ある日爺様婆様は娘を嫁子にやるために、町へ衣裳買いに行って、娘一人で留守居をしながら機を織っていた。するとそこへ山母が来て、娘々この戸を開けろ、娘々この戸を開けろと言った。そして娘が本意ないのに、山母は戸を開けて入って来た。

それから娘に米をとげと言って米をとがせて、それを大鍋に入れて、御飯を炊かせた。そうしてたくさんの握飯をこしらえさせて（何かの上に）ずらりと並べさせた。

山母はそれから髪をほどいて、頭の脳天にある大口をあんぐりと開いて、その握飯を手毬をとるように、どんどん、どんどんとその口へ投げ込んで、見ているうちにペラリと食ってしまった。

そうしてそこに糞をベタベタと山のようにたれた。

そのありさまを隅っコの方に隠れて、おっかながって見ていた娘に、山母が言うことには、娘々俺が帰ったら、この糞を川へ持って行ってよくもんで洗ってみろと言って出て行った。

娘は山母が立ち去った後で、山母のたれた糞を笊に入れて川へ持って行って、よくよくもんで洗うと、それがとても立派な綾錦となって、ずっとずっと長く長く川下へ流れ晒されて行った。

この話を記載した後にすぐ続けて、佐々木喜善は、次のような付記を書き加えている。

昭和５年６月、藤原相之助先生から聴く。この後段の話もあったようであるがお忘れになられたという。こうして発表しておいたらいつか何人かが補遺完成してくれるかと思うからである。

ところがこの昔話は、佐々木喜善がここで期待したような他の何人かによる「補遺完成」をわざわざ俟つまでもなくして、その後佐々木に対する当の語り手であった藤原相之助自身によって、ずっとより詳しい内容の紹介がされている。なぜなら藤原は、昭和11年に発表した「昔話の思い出」と題された小文の中で、幼少時に祖母からくり返し聞かされたいくつかの昔話の一つに、次のようなものがあったことを、語り出しの部分では祖母自身の語り口を模しながら、すぐに「駄目であった」としてその試みを放棄して、こんな風に報告しているからだ。(2)

昔あったぢをナ、昔あるところに、ウル姫子といふ姫子あッたぢを。家の人たちはみんな畑さ行たあとで、毎日家で機コばかり織って居たぢを。キーカラリ、パタリヤ、キーカラリ、パタリヤ。すると山から山姥がノッソリ、ノッソリ下りて来て、窓から顔をヌーと出して「ウル姫子、ウル姫子何してるバ」。「機コ織てるんす」。

こうして山姥とウル姫子との問答となる。山姥は飯を食わせれと要求する。山姥はウル姫子の家のキシネ櫃に米が一ぱい入ってることも知てるし、大釜が釜場に据えられてるのも見てる。そして薪が木小屋にあることも知って居て、サア飯を炊いて握り飯を拵えてそれを戸板の上に並べて、俺に食わせれという。ウル姫子は素直に山姥のいうことを聞き、其通りにすると、山姥は戸板の前に坐って、藤蔓を束ねたような髪をほどくと、頭の上に大きな口がアングリとあ

いて居る。山姥は握り飯をポンと投げ上げて頭の口でパクリと食う。ポン、パクリ、ポン、パクリ、皆食ってしまって山さ帰って行く。其次の日もウル姫子は、キーカラリ、パタリヤと機コ織ってると、又山姥は山からノッソリ、ノッソリ下りて来て窓から顔をヌーと出して、ウル姫子、ウル姫子何してるバという。機コ織ってるんすというと、アノ水屋上の李、俺に食わせれという。水屋上の大きな李の木には、真赤な美しい李が、枝の裂けるほど生ってる。何ぼでも食ってせというと山姥はワサ、ワサ、ワサ、ワサと木登りして李を一粒も残さないで皆食ってしまう。その次の日には、ウル姫子は機コ綜て居た（経糸を筬さ通して機を仕かける）。山姥は又山からノッソリ、ノッソリ下りて来て窓から顔をヌーと出して、ウル姫子、ウル姫子何してるバという。機コ綜てるんすというと、美しいヘソ糸だナ、俺そのヘソ糸食いたくなったから、それ皆こっちさよこせという。ウル姫子は、素直にいうことを聞いて、白いヘソ、黒いヘソ、赤いヘソ、青いヘソ、欝金コのヘソ、皆出してやると、山姥は頭の口をアングリとあいて、ズル、ズル、アム、アムとみんな食ってしまってから、ウル姫子、ウル姫子、明日の朝になったら、この窓の下さ来て見れ。そこに何かあんべから、大事にしとれェ、あばえと云て山さ帰って行った。ウル姫子はヘソコみんな山姥に食われてしまって、明日から機コ織るべきないと泣いてると、晩方に家の人たちは畑から帰って来て、ウル姫子、ウル姫子何して泣くバと問う。ヘソコみんな山姥に食われてしまって機コ織るべきないという。ヘソコ食われても、又糸コ績んで染めさえすれば出来るさかえ何泣くことあんべ。早く晩飯たべて寝べしと慰めて呉れる。次の朝窓の下さ行て見ると、蓆の上に、山のように糞たれてある。みんなはそれを見て、アヤヤ、こただ汚ないもの、雪隠さでも投げべという。ウル姫子は、そんでも山姥は大事にしとれェと云たから、雪隠さ投げたら悪かんべ、洗って取って置くべいとて、みんな手伝って貰って後の川さヨイショ、ヨイショと鼻つまみ乍ら担いで行て、川瀬さドサッと入れると、糞が溶けて、その中から、五色の蜀江の錦がほぐれ出して、川瀬の流れになびいて、ユーラ、ユーラとほどけて行て、一の橋過ぎて、二の橋過ぎて、三の橋の下まで続いたから、何ともかとも云うべきないほど美しかった。それから錦の長者と呼うばれた。呼うびも呼んだし、呼うばれた。ソレキテトッピンパラリンプン。

この昔話の中では山姥について、真に怪奇と思えるようなことが、２つ物語られている。まず第１に山姥は頭の天辺に、ふだんは髪の毛に覆われていて見えぬ、巨大な口を隠し持っている。そして髪をさんばらにほどいて、あんぐりと開いたその口をいったん露呈すると、たちまちほとんど底無しのような食欲を発揮して、ご飯でも果実でもあるいは糸のような食べられぬものでも、ぽんぽんとその口の中にまるでお手玉のようにどんどん投げこんで、あっと言うまにあるだけぺろっと食べ尽してしまう。また第２に山姥は、自分の身体から大便として、びっくりするほど大量の高価な宝物（この話では蜀江の錦）を、自在に排出できる不思議な力を持っていることになっている。

このうちまず山姥が髪の毛の下に、巨大で実に貪婪な口を隠し持っているということは、周知のように、人口にずっとより膾炙し、全国的に分布している昔話の一つの中でも、物語られている。それは言うまでもなく、「食わず女房」の話で、長野県下水内郡で語られた次の昔話は、その典型的な例の一つと言ってよいだろう。(3)

昔が一つあったとさ。

あるところにあにが一人きりで暮らしていたと。そしてこのあには、まんまを食わない嫁を捜していたんだと。

そうしたら、一人のあねさんがたんねてきて、そうして

「おらまんまを食わねえで働くすけ、ここの家の嫁にしてくねえか」といったと。

あにはまんま食わねで働くというすけ、よろこんで嫁にしたと。そうしてよく働くすけよろこんでいたと。

そうしたところが、あにが山へ仕事に行っていねえとき、隣のばあさが、まんまを食わぬ嫁ってどんなものかと思って、こっそりのぞいてみたんだと。

そうしたら、その嫁はでっかい鍋にまんまを一杯たいて、そうしてにぎり飯をたくさん作ったと。そうしてどうするのかと思って見ていたら、頭の毛をほぐして、頭にあるでかい口の中へほうりこんだと。

ばあさは、たまげてあにそのことを聞かせたんだと。あにはおっかなくなって、これは山んばに違いないと思って、夕方山から帰ったようなふりをして家に帰って、

「おらやっぱり一人でいるのが一番いい。おまえもういいすけ、どっかへ行ってくれ」っていったんだと。そしたらかかは、

「そうか、そうしやらおらこの家を出て行くが、おまえすまねえが、桶一つこしゃってくんねえか」といったと。

「ああ、そんつらもん、ぞうさねえ」てんで、あには桶を一つ作ってやったと。

そうしたらかかは、

「おまえこの桶の中へちょっとはいってみてくれ」っていうだと。

「よしよし」てんで、あにが桶へ入ったら、かかはすぐに蓋をして、荷縄でおっぱって、どんどん山ん中へとんで（走って）行ったと。

そうしたら、道端の松の木の枝が道の上に出ていたんで、あにはその枝につかまって、桶の中からやっと逃げ出したんだと。

山んばはそうとは知らねえで、どんどんとんで行ったでも、桶が軽くなったすけ、わかったんでしょうねえ。桶を降ろしてみたら、中はからっぽだったと。

「この野郎逃げたか」てんでまた戻ってきたんだと。そうしたら、あには菖蒲の中へ隠れたんだと。

そうしたら、山んばはそこまで追ってきたでも、

「ここはだめだ」って、いってねえ、どっかへ行ってしまったと。

それでねえ、ここらではいまでも五月の節供にねえ、菖蒲とモグサ（蓬）を軒にさすんです。

「食わず女房」の昔話にはこのようにまず、「飯を食わずに、仕事はちゃんとしてくれる嫁がいたら結婚してもいい」と、何とも虫がよすぎると言うほかないとんでもない願望を公言しながら、独身を続けていた男がいたということが語られる。そうするとあるとき、その男の家に美しい女がやって来て、「自分は飯を食べずに、よく働くので、どうか女房にしてください」と言って、男を喜ばせて夫婦になる。そして本当に飯を食べずに、よく仕事をするので、男はしばらくは満足して、この女房と仲良く暮らすが、そのうちに「いくらなんでも、飯を食べないのはおかしい」と不審に思った男自身かまたはその隣人あるいは友人が、男が出かけた後の家の中をこっそり覗き見していると、女房は五升も米の炊ける大鍋にいっぱいの飯を炊き、それで握り飯を作って戸板などの上に並べたかと思うと、髪の毛をほどいて、頭の天辺に隠れていた大きな口を剥き出しにする。そしてその中にどんどんお手玉のように投げこんで、山のようにあった握り飯をまたたくまにぺろっと食べ尽してしまう。それで女房の正体が実は山姥だということが分かった男が、恐れて別れようとす

ると、山姥は男を騙して大きな桶を作らせて、その中に入らせておいてから、その桶を担いで、男を食うために山奥にある住み処までさらって行こうとする。だがその途中で男は、辛うじて逃げ出して、蓬と菖蒲の茂みの中に身を隠すと、そこまで追い駆けてきた山姥は、蓬と菖蒲が持っている魔除けの力に妨げられ、男を食うことをあきらめて、口惜しがりながら山奥に帰って行った。それでこのときから五月の節供に蓬と菖蒲を魔除けのために、家の軒とか屋根に飾ることになったのだと物語られている。

つまりそのことをこのように、すこぶる印象的に物語っている昔話が、全国的に伝承されることによって山姥は、その不気味な怪物的性質の１つとして、頭の天辺に貧婪な大口を隠し持っていると、津々浦々で言い伝えられてきたわけだ。だからこそ先に掲げた長野の昔話でも、覗き見をした隣家のばあさから、自分の女房が頭の天辺に山のように大量の握り飯をあっと言うまに食い尽す口を隠していると知らされた男が、そのことからすぐに「これは山んばに違いない」と思ったということが、まるで当然であるように物語られているのだと思える。

他方ではまた山姥が自分の身体から、どんな不思議なものでもいくらでも自在に出す力を持っているということも、いろいろな昔話に印象的に物語られている。香川県坂出市に伝承された次の話もその１つで、この話では山姥は、老婆であるにもかかわらず実に巨大な乳房を持っていて、そこからまるで綱のように頑丈な糸を、乳としていくらでもしぼり出せることになっている。(4)

昔、親子の漁師がいた。夜漁に行って漁もすんだので、念仏の鼻（岬）のところで火を焚いて休んどった。そこへ山から一人のお婆さんが降りて来て、

「寒いけに火にあたらせてくれ」と言う。親子は気味が悪いが火にあたらせてやった。親爺がそのお婆さんの風を見ると、どうも山姥のようじゃ。これはうっかりすると食われてしまうと思うたので、子どもに目くばせして、

『お婆さん、鯛があるんじゃが、一切れ上げるけに待っていな」と言うて子供を鯛を取りに船のところまでゆかせた。鯛が無いのを親爺は知っているので、子供が、「無いわ」と言うてもどって来ると、「あっちに無ければこっちかな」などと言うて子供に捜させた。そしてそのすきに逃げようとしとった。やがて親爺が山姥のすきを見て海の中にとびこんで、艫綱を切って船を沖の方へ押し出した。山姥はそれを見て、「さてはわれをだましたなあ」と言うて大きな乳を出して、乳をシュウとしぼり出した。乳が船にかかると船はたぐりよせられそうになる。山姥は何度も何度もしぼり出すので、船は大揺れに揺れながら山姥の方へ寄って行く。もう少しで山姥の手のとどくところまで行った時に、親爺は庖丁でその乳の糸をこすって切ってしもうた。そこでとうどう助かったそうな。

(2)昔話「姥皮」の中の山姥

身体から何でもまるで無尽蔵のように出す不思議な力を、山姥が持っているということはまたこれも全国的に分布し、人口によく膾炙した昔話の１つである「姥皮」の型に属する話の中でも、しばしば明瞭に示唆されていると思える。この昔話のもっとも普通の形では、３人の美人の娘たちを持つ父親が、蛙が蛇に呑まれかけているのを見てかわいそうに思い、娘の１人を嫁にやると蛇に約束をして、蛙を助けてやる。帰宅してその話をすると、上の２人の娘たちは、「蛇の嫁になるなんてまっぴらだ」と言って断わるが、親孝行な末娘が、「親が約束したことだから」と言って、蛇と

の結婚を承知する。そして賢いこの娘は、鉄が蛇には猛毒であることを利用し、父に嫁入り道具に千本の針を準備してもらって、それを持って迎えに来た蛇と同行し、途中で巧みなやり方でその針が蛇に刺さるように仕組んで、蛇を退治してしまう。そのあとで娘は山奥で日が暮れたところで、1軒家を見つけ泊めてもらう。そうするとその家の主の不思議な老婆が、実は娘の父に命を助けられたあの蛙で、娘がその上に自分の敵の蛇まで退治してくれたことを聞くと、非常に感謝し、お礼にそれをかぶると汚ない老婆の姿になれる「姥皮」という宝物の皮を娘にくれる。その皮をかぶり老婆に変身をした娘は、そのおかげで危難にあわずに山を下りて、ある村に行き、そこでとても有福な長者の家に、下女になって住みこむ。そしてある夜、自分の部屋で姥皮を脱ぎ、美女の姿でいるところを、その家の1人息子に見初められ、幸福な結婚をしたと物語られている。

いくつかの話からは、この蛙の姿になることもある不思議な老婆が実は山姥で、宝物の「姥皮」というのは実は、山姥自身の皮に他ならぬことが明瞭に窺えると思える。山梨県南都留郡で語られた、次の話もその1つである。(5)

昔、ある家に三人の娘があって、三人ともみんな器量人（美人）だった。その家のお父さんが、あるとき伊勢参りに出かけたが、途中まで行くと、道端で一匹の蛇が蛙を呑みかけていた。「伊勢参りに行く途中だで、虫けらでも助けてやんべえ」そう思ってお父さんは蛇に言った。「これ蛇どの、ぜひゴタの命を助けてくれろ。そうしろば、俺家にゃあ娘が三人あるだで、そのなかの一人を嫁にやるから」。蛇はそれがわかったと見えて、口をゆるめたから、蛙は蛇の口からはみ出して、やっと命拾いをして、向こうの方へペンコン、ペンコンと飛んで行ってしまった。

お父さんは無事に伊勢参りをすませて、家に帰って来たが、行く途中で蛇と約束したことが心配でならない。それでまず一番大きな姉娘を呼んで聞いてみた。「そういうわけだで、いまに蛇どのがもらいに来るから、どうだ、お前が嫁に行っちぁあくれぬか」すると姉娘は顔色をかえて、「とんでもねえ、蛇のおかたなんかにゃ、俺ァいやだ」と言うなり、向こうの方へ行ってしまった。お父さんは今度は中の娘を呼んで聞いてみると、中の娘も顔色をかえて、「蛇のおかたなんかにいやのこと。姉さんのいやのような所はいとど（一層）いやだ。」と言って、向こうの方へ行ってしまった。

お父さんはがっかりして、末娘には聞いてみようかどうしようかと思ったが、気をとり直して末娘を呼んだ。「姉ェが二人ともいやだというので、おめェが嫁に行ってくれなきやァ、おれの命がねェ。どうか行っちゃァくれぬか」すると末娘は、顔色も変えずに答えた。「親の命とつりかえにゃァなんねェから、はい、おれが行くべェ。けんども、行くについちゃァ、千なり瓢箪を千箇と、針を千本買ってもれェてェ」。「あァ買ってやるとも。お前の欲しい物は何でも買ってやる」。父親は喜んで、すぐに町から千なりふくべを千箇と、針を千本買って来てやった。

そうすると、もう蛇がいい男の聟どのに化けて、娘をもらいにやって来た。末娘は、千箇のふくべに針を一本ずつ入れて、それを持参品として、その男のあとからついて行った。だんだん山奥へはいって行くと、深い谷間に大きな川が流れていたが、橋がなくては越すことができない。「おらァいま正体を現わすが、びっくりするなよ」と言うとその男はたちまち大蛇になって、谷川の向こう岸まで身体を伸ばして橋にかかった。「さァ、恐くはねェから、おれン背中にのぼって渡れ」。

末娘はいわれるままに、大蛇の背中を渡りながら、持っていたふくべをわざと谷川に流した。

「あれ、親からもらって来た大事の物を流して困るン、早く拾ってもれェてェ」。末娘の頼みだから、大蛇は谷川に飛びこんで、ふくべを一つずつ拾っては、みんな呑みこんでしまった。するとふくべは大蛇の腹の中で溶けて、針だけが残り、その針が大蛇の身体へみんな刺さった。鉄は蛇には大毒で、大蛇はほうがい（たいそう）苦しんだ末、腹を上向きにして死んでしまった。末娘はどこかの里へ出ようと思って、谷川のふちをだんだんくだって行った。ところが途中で日が暮れて、あたりはまっ暗になった。末娘が困っていると、向こうの方にあかりが一つ見える。あそこへ行けば誰か人がいるに違いないと思って、そのあかりを目当てにたどりつくと、それは一軒のあばら屋で、中には一人の婆様が糸車をブンブン廻していた。

「俺ァ道に迷って困るけれ、ぜひ一晩泊めてもれェてェ」。末娘がお願いすると婆様は、「おめェは、普通じゃァこんなとこへ来るはずんねェが、どうしてこの山奥へ来た」とたずねた。末娘が、蛇の嫁になって来た一部始終を話して聞かせると、「おめェの話を聞いていると、有難くてなんねェ。俺ァ実はおめェのお父さんが伊勢参りに行くときに、助けてもらったカイロだ。もとは俺ンこの山の王様だったが、あの大蛇が来てからは、眷族をみんなとり殺されて、俺一人になってしまった。そして今ではあの大蛇が山の王様になっていたが、おめェが殺してくれたから、今度はまた俺ン山の王様になれる。おめェのお父さんもおめェも俺の大恩人だ。さァさァ中へ入って泊まるがいいだ」。婆様は末娘を上へあげてお礼を述べ、いろいろ御馳走をして、親切に泊めてくれた。

明日の朝末娘が眼をさますと、婆様は「おめェはなかなかの器量人だから、普通じゃァ世の中は渡っちゃァいけぬ。村屋に行くまでは悪い鬼がいて、ただじゃァ通れぬから、これをかぶって行け。これは『化けの皮』というもんで、これをかぶると汚ねェ婆さんになるから、昼の間は決して脱ぐじゃァねェぞ」と言って、ガマの皮でできた頭巾を一つくれた。末娘はその化けの皮をもらって頭からかぶり、汚ない婆さんに化けた。

里へ行く道を教わって、山をくだって行くと、途中に悪い鬼どもがいて、「どうも人臭えぞ、人臭えぞ』といいながら鼻でそこらじゅうを嗅ぎまわり、すぐに末娘を見つけた。「なんだこんな汚ねェばんばァか。ばんばァどけェ（どこへ）行くだ」。「俺ァ村屋へ塩買いに行くだ。早く通してくんな」。「こんなばんばァじゃ、骨と皮ばかりで食べられねェ。早く通ってうされ（失せろ）」。鬼どもはそう言って末娘を無事に通してくれた。末娘は山をくだって村屋へ出ると、一軒の大家へ行って、ご無心いって居候においてもらった。末娘は寝るときのほかは決して化けの皮の頭布を取らなんだから、誰も汚ない婆さんだとばかり思っていた。

ところがある晩、末娘が化けの皮を脱いで、一番おそく風呂にはいっていると、その家の一人息子の若旦那が夜遊びから帰って来て、「はて、今ごろ誰が湯にはいっているだか」と思ってすきまからのぞいて見た。するの眼のさめるような美しい女が湯にはいっていたので、若旦那はびっくりした。その女は湯からあがると、物置に帰って寝るのだが、明日の朝物置から出て来るところを見ると、汚ない婆さんになっているから、どうも不思議でならぬ。そうしているうちに若旦那は末娘にすっかり惚れこんで、「物置にいるお婆さんを、俺の嫁にもらってくんな」と両親に頼んだ。

「とんでもねェ、おめェは気でも狂ったか。あの汚ないばんばァを嫁にしてどうする気だ。駄目だ。駄目だ」といって両親は許してくれない。とうとう息子は恋の病になって死ぬか生きるかという大病になった。医者も薬も、易を見てもらっても効き目はなく、息子は日にまし弱るばかりだった。

大事な一人息子の命にはかえられないから、両親もあきらめて、物置にいる婆さんに、息子の嫁になってくれと言った。「とんでもねェ、おれのような汚ねェばんばァが、若旦那の嫁になんかなれようねェ」。末娘の婆さんは断わったが、「息子の命にはかえられねェから、どうでも嫁になってくれろ」。両親があまりたのむので、末娘はやっと承知をして、寝ている息子の枕元へ行った。

そのときはもう化けの皮の頭巾を脱いで、眼のさめるような美人になっていた。これを見た両親も、家の衆もみんなびっくりして、「なるほど、これじゃァ息子ン惚れるも無理はねェ」と言って、急いで末娘の故郷へ人をやり、仲人を立てて親もとへ話をした。「あの子が無事でいてくれたか。こんなめでてェことはねェ」。末娘の両親は大そう喜び、話はすぐまとまって盛大な祝言の式をあげ、末娘は大家の若旦那の嫁になって、一生安泰に暮らした。そして化けの皮（ガマの頭巾）は、永くその家の家宝にしたということだ。

この昔話ではこのように、ここでは「化けの皮」と呼ばれている「姥皮」の持主であった不思議な老婆は、もともと自分が住んでいる山の王様、つまり山を領く主のような存在だった。そして自分から一時その地位を奪っていた仇敵の大蛇が退治されたおかげで、またもと通り山の王様になれることになったと言って、そのことを果たしてくれた親孝行な末娘に非常に感謝したと語られている。

このことからこの不思議な老婆が、話それ自体の中でそう明言されていないにもかかわらず、実は山姥であることが明瞭に窺える。なぜなら民間の伝承と信仰の中で山姥は言うまでもなく一般に、山奥に老婆の姿で一人住まいをしながら、その住む山を主として領く存在と見做されてきたからである。

そのことはまたこの老婆が、末娘がその住み処をたずねたとき、「糸車をブンブン廻していた」と物語られていることからも、明瞭に確められると思える。なぜならこれも周知のように、山姥は一般に山奥の住み処で通常は糸くりに従事しており、この作業に関してとりわけ、不思議な神通力を発揮するように語り伝えられてきている。

前掲した香川県坂出市の昔話にも、山姥が巨大な乳房から不思議な糸をシューッといくらでもどんどんしぼり出したことが物語られることによって、山姥が持つと一般に信じられてきた糸を無尽蔵に産出する力が、きわめて印象的に描写されていた。またその前に掲げた、藤原相之助が幼少時に祖母から聞かされたとして報告している話の中でも山姥は、五色の糸をウル姫子から取り上げて、アム、アム、ズル、ズルと頭の口から残らず呑みこんでしまってから、それを自分の体内で五色の蜀江の錦に変えて、大便として排出することで、やはり糸と関係する不思議な産出力を発揮してみせたことを物語られていた。

山姥が糸を無尽蔵に産出したり増やす力を持つことを語った話は、柳田国男によってもつとに注意されたことで著名な、「山姥のおつくね」に関する伝承(6)をはじめとして、一々あげればむろん枚挙にいとまがないほどある。島根県邑智郡桜江町に伝わるという、次の伝説もその一つである。(7)

清見の大掛に榎の木山がある。むかし、この山に山姥がいて、川淵（屋号）や田原（江津市市川平）の伊の木（屋号）に木綿糸を引きにきたという。山姥が糸ひきをすると、巻いても巻いても糸が出てくるので、不思議がられ、その糸は榎の木山よりも、もっと高くなったという。ある時、地主が榎の木山の木を伐り払ったため、山姥は原山（石見町矢上）に行くことにしたが、途中、田原の伊の木に立ち寄り、子供がいたので飯がいくらでも増える杓子を一本渡して行ったという。その後、伊の木では、この杓子で飯を増して食べていたそうである。榎の木山

の五合目あたりに、ヤマンバアさんのセンチ岩というのがある。

山姥が正体を現わしたところを見ると、見るからに恐しい姿で糸車をぐんぐんまわしている鬼婆であったことを物語っている昔話の数も、言うまでもなくやはり枚挙にいとまがないほど多い。その中でもことに印象的と思える例の一つとして、ここではただ、宮城県の登米郡で語られた「三枚の護符」の昔話だけをあげておこう。(8)

この話では、和尚さんと二人きりで山寺に暮らしていた小僧っ子があるとき、山で薪を取っているあいだに一人の女の人と会い、「俺はお前の叔母さんだ。御馳走するがら、おら家さ行こう」と言われて、山奥にある一軒家に連れて行かれて、そこで非常な歓待を受ける。ところがこの女の人は山姥で、その夜に小僧を床につかせてから、糸車をまわしながら人食いの鬼婆の正体を現わして、小僧っ子を震え上がらせたので、その有様は次のように語られている。

（夕食後に小僧は叔母さんだというその女の人から）「小僧や、これから糸取りするがら、疲れだべがら早く寝ろ。寝ろ」て、次の間さ寝せられたど。叔母さんが糸取りし始ったら、糸取りの音が、

“グーン・グーン・グーン・小僧食でっ。グーン・グーン・グーン・小僧食でっ”

ていうように聞けたど。小僧っコあ、たんまげて、息を殺してじいっと聞いてたら、やっぱり、　糸取りの音が、

“グーン・グーン・グーン・小僧食でっ。グーン・グーン・グーン・小僧食でっ”

て聞こえんだど。

これらの例によって、前掲した山梨県南都留郡の「姥皮」の昔話で、山を領く主的存在として山奥で一人暮らしをしながら、糸車をブンブンまわしていたと語られている、不思議な老婆が、実は山姥に他ならぬことが明らかであろう。

この話の冒頭ではこの山姥は、蛙の姿になって人里に現われ、そこで蛇に呑まれかけていたことを物語られていた。そしてその山姥が恩人の娘に贈った、ここでは「化けの皮」と呼ばれている宝物の姥皮は、ガマの皮であったと言われている。老婆の姿にも蛙の姿にもなれる山姥がくれた、かぶると汚ない老婆の姿になり、脱げばたちまちどんな大家の若旦邦でも一目でたちまち恋せずにいられないほど、絶世の美女の姿に戻れる、不思議な変身の宝物の実体が、がまがえるの皮であったというのだから、この話からは山姥の宝物の姥皮とは実は、山姥がそれをかぶったり脱いだりすることで変身をする、山姥自身の皮に他ならぬことがはっきりと窺える。

その上また「姥皮」の昔話の中には、蛙に変身して蛇に呑まれかけたところを、娘の父親に助けられた上に、娘に蛇を退治してもらったお礼にこの宝物を贈ったという、いわゆる「蛙報恩」の話素は欠如しているが、その代りに姥皮の贈り主がはっきり山姥であったと明言されている話も見つかる。姥皮の持主が山姥で、この宝物が姥の皮つまり山姥自身の皮であることは、このことからますます明瞭に確められると思える。岩手県二戸市で語られた次の話も、その一つである。(9)

昔々、あったず。

ある所ね、爺様ど婆様ど、一太郎、二太郎ずわらし（子供）ど、三子ずめわらし（娘）ぁあったず。爺様も婆様も年取って死んだけりゃ、一太郎ぁ、

「おらばり三人ねなったば、だれも世話して呉る人も無えし、とても、かまとたでで（家をやって）えげねぇし、家、屋敷売ってその銭分げで、三人ばらばらになって暮らすべぁ」て、三十両ね売って十両づつ分げだず。そやて、三人して、此処らだば、福岡がら御返地のあだりさ行ったば、道ぁ三本分がれでらへで、一太郎ぁ右の道、二太郎ぁ左の道、三子ぁ真中の道行ぐごどね

して、見るうぢぁ、てんでね「ほーえ」「ほーえ」て、受け声して歩りたず。三子ぁ、三日も歩いてらけゃ、どっち見でも山ばかりで、暗くなったし、女一人こでおっかねぇどもてらけゃ、明がしこぁてかてかど見だへで、泊めでもらべどもて、

「今夜、ひとつお願ぇします」て、行ったけゃ、おっかねえ婆居で、

「此処ぁ、人ぁ来る所でぁ無ぇや、何処から来てぇ」たへで、わげ（事情）話して、

「こういうわげで来たへで、是非泊めで呉ろ」たけゃ、

「へだら、先づ入れ」て、泊まるごどねなったず。そやで、さまじゃま話してうぢね、その婆様山姥だずごどぁ分ったず。山姥、三子さ、

「お前ゃ、見ればめげえ（可愛い）娘だ。此処から出はれば鬼ねさらわれるだ。おれね使えろ」て、其処で使れで、十五の春までおがされ（育てられ）だず。すたけゃ、

「お前も、一人前のあねこ（娘）ねなった。此処から三里ばり行ぐと大きな村あって、大きな百姓家あるぁ、其処さ行って、飯炊ぎにでもお願ぇして大きぐなれ。村さ入るねぁ、これ着て行げ。これ着れば八十ねも見る婆ねなって、だれも、かもねぇや」て、姥皮呉だへで、それもらって村さ入る時ぁそれ着て、八十位の婆ねなってほえど（乞食）の様ねなって、やどで（家毎）聞でて大きな百姓家さ行って、

「此処で飯炊ぎねでも使って呉ながべが」て、聞だば、

「丁度、今飯炊ぎぁ居ねぇへで使べゃね」て、其処の飯炊ぎねなったず。そやて、夜ねなってあれぇしめぇ（台所仕事）ぁ終れば、我ぁ部屋で姥皮脱えで、かんてらこつけで、本がらがらど読んでらへで、えぇなさま（若旦那)おがしどもて、すき見こしてみだけゃ、ちゃんともよ（着飾）った姉様居で本読んでらへで、恋患ぇして熱出して、寝込んでしまったず。へだへで、あっちの医者、こっちの医者ど頼んで診でもらったずども、何病気だが分らながったへで、物識りがら聞でみだば、

「使れ者さ、恋患ぇしてる」て、言たず。若旦那、夜遊びばりすへで、嫁取らねばなねえずごどねなって、初めぁ、他がら七人連で来たのさ飯持だへでやっても食ながったへで、今度ぁ、家で使ってら十三人のうち、十二人さ持だへでやっても食ながったへで、

「最後ねもう一人残ってら」て、飯炊ぎぁ姥皮脱えで、ゆさ入って、ちゃんともよって行ったけゃ、

「お前だら食う」て、一升鉢の飯食ってしまったず。次の日ねなったけゃ、かが様、三子さ、

「お前、なただまね（どんなまね）して、あたねきれぇねなってぇ」たへで、事情話したば、安心して嫁ねすごどねして、その村ねぁ無ぇ位良嫁ねなったず。そやて、あにぁど（兄達）ぁ何処ね居るが分らながったへで、なごぁど（名子達）よんで、二日も振舞ぇしたず。二太郎ぁ、江戸さ出はて大き小間物屋ね使れで、偉ぇだんな様ねなって、刀も差へるようねなったへで、親達の仏様拝むね来て、知らねぇで三子の家さ泊ったず。そやて、二太郎ぁ遠ぐがら三子見でれ、はへ、なんだが見覚えのあるつらづき（顔）のあね様だ。妹の三子ね似でるども、こただ所ね使れでるべがな、どもて寝だず。次の朝、顔洗へどもて、はしりめぇ（流し）さ行ったけゃ、あね様居だへで、

「お前や、三子でながべが」て、聞だけや、

「ほだ」たへで、

「おれぁ、二太郎だ」て、兄妹名のりして、

「一太郎ぁ、二十四人の家来持って泥棒してる」て、す（教）かへだず。そやて、七日泊って

「これ以上長ぐ泊ってらえねぇ、仏様拝むね来たたへで」て、行ったず。

これ聞でどっとはれぇ。

ところでこのように、実は山姥自身の皮であったことが明瞭に窺え、つまり山姥の身体の一部と見做せると思えるこの姥皮は、いくつかの話では、それをかぶったり脱ぐことで老婆と美女とに自在に変身ができただけでなく、それから欲しいものを何でも出すこともできたとも物語られているのだ。新潟県長岡市で語られた話[10]では、この宝物を授かったときに親孝行な末娘は、その使い方を次のように説明されたと語られている。

「この宝物は『いもくし（あばた）蛙の皮』で、これをかぶると婆さになるし、ほしいもん出れと言うて、三つたたくと、望みのもんが出る」。

そして話の結末では、感心な末娘がこの話でもはっきり「蛙の皮」であったと言われている姥皮から、さまざまな美しい衣裳や飾りなどを出して、立派な支度を整えて幸福な結婚をしたことが、こう語られている。

それから「十二ヒトイ出れ」、「かみ飾り出れ」と、蛙の皮から、嫁入り着物なんかを出して、めでたく夫婦ねなって、一生安楽に暮した。

また柳田国男の『日本の昔話』の中には、山梨県（甲斐）の昔話として、次のような興味深い話もあげられている。[11]

むかし、むかし或山国の田舎に、美しい一人の娘がありました。春の日に村の人たちと山へ遊びに行って、路をまちがえて自分だけ、遠くの方へ行ってしまって、帰ることが出来なくなりました。そのうちに段々日が暮れて来て、どっちへ行くのがよいかと思って困っておりますと、向うにたった一つ燈火が見えるので、大喜びで尋ねて行きましたら、それが山姥の家で、山姥が一人で囲炉裏に当っていました。折角尋ねて来たけれども、ここは人を食う者の住居だから泊めてやることは出来ぬ。並の人間の家を探す方がよいと言いました。娘はこれを聞いてぞっとしましたが、もう食べられても構いませんからどうか泊めて下さい。どうせ今夜のような暗い晩に、これから山の中をあるいていれば、熊か狼かに食べられるにきまっております。それよりもここで食べられた方がまだよいからと言いました。

山姥もそれを聞いて哀れに思いました。それでは大事な私の宝物だけれども、宝蓑という物をお前に上げるから、これを被ってもっと先へ行くがよい。この蓑を着て三遍如法の唱え言をすると、老人にでも子供にでも、自分の思った通りの者の姿になれる。又欲しいと思う物はこの蓑を持って振ると、なんでも出て来るからと言って、きれいな一枚の蓑をくれて、使い方を教えてくれました。娘は喜んでその蓑を貰って、早速よぼよぼの婆さんの姿になって、山姥の家から出て来ました。途中には怖しい鬼が集まって、待ち伏せをしている所もありました。あれ人が通る、取って食おうかという鬼があると、よせ、よせ、あんなきたない痩せた婆あを食ってもつまらないと他の鬼どもが止めました。そうして漸く夜の明ける頃に、知らぬ里に出て来て、ある長者の門の前に立ちました。私は行く所もない者です。どこの隅にでもよいから置いて下さいと言うと、情深い長者で、それでは長屋の空いている所にいるがよいと言ってくれました。

それからその長屋にいて、昼は糸紡ぎなどをして暮し、夜は退屈なものだから、誰も知らない間にそっと元の娘になって、手習いなどをしておりました。長者の息子が或晩遅くなって外に出て見ますと、長屋にたった一つ燈し火の光がさして、覗いて見ると美しい娘が一人静かに手習いをしています。どうかあの娘を嫁に欲しいものだと思って、次の日屋敷中を探して見ま

したけれども、もうそんな女は何処にもおりません。不思議なこともあるものだと思っていると、今度は家の下男がどうかしてその姿を見つけまして、化け物かも知れぬと思ってその事を長者どのに話しました。それで早速この婆を呼んで来て、段々証拠を出して責めて見ますと、娘はもう仕方がないので、山姥に貰って来た宝蓑の話をしました。そうしてその蓑を脱いで娘の姿に戻って、自分の家と所を詳しく言って、どうか私の家へ届けて下さいと頼みました。長者の力で探して見ると、娘の家はやがてわかりました。家ではもう死んだ者と思って、お祭りをしていたそうであります。それを送り返してやると、大騒ぎをして喜びました。それから暫くしてその娘を、長者の家の嫁にもらうことになって、一家仲よく皆栄えたそうであります。めでたし、めでたし。

この話でもやはりこのように、山奥で行き暮れた美女の娘が、山姥の家を見つけてそこに行き、不思議な宝物を山姥から授かったことが物語られている。山姥が娘に贈った宝物はこの話では、蛙の皮ではなくて、一枚のきれいな蓑であったことになっている。しかしこの宝蓑はこの話でも、娘がそれを着てよぼよぼの老婆の姿に変身して、危難を免れ幸福な結婚をする役に立ったと語られているのだから、明らかに姥皮の一つの変種だと見做せる。そして姥皮の変種だと見做せるその宝物には、この話でもやはり、それを着て変身ができただけでなく、欲しいものを何でも出してくれる力もあったことが物語られている。

その上またこの宝蓑には、話の中で実際には、他の昔話に出てくる姥皮と同様に、ただもっぱら美女の娘が護身のため汚ない老婆の姿に身を裏すためにだけ、使われたように物語られてはいるが、本来はそれよりもずっと広汎な変身を可能にする力があったことにもなっている。なぜならこの宝を授けるに当たって山姥は娘に、「この蓑を着て三遍如法の唱え言をすると、老人にでも子供にでも、自分の思った通りの者の姿になれる」と教えたと言われているからで、つまりこの宝には本来はそれを着ることで老化でも若返りでも自在に遂げられる力があったことになっているわけだ。

この宝蓑にあったとされているこのような老化と若返りとの二重の変身を遂げさせる力は、伝承の中で山姥が持っているように言い伝えられてきている変身の能力と、まさにぴったりと合致している。なぜなら前掲した「食わず女房」や、また「三枚の護符」など、いくつかの昔話の中で山姥はしばしば、人食いの鬼婆の姿を現わす前に、まず非常な美女の姿で現われて、主人公の人間の男を魅惑したり誘惑したことを物語られているからだ。

新潟県柏崎市で語られた、明らかに「姥皮」の類話である次の昔話⑿には、蛙の姿にもなる山奥に住む老婆（＝山姥）が、家にたずねて来た自分の大恩人である人間の娘に、蛙の皮ではなくて、一本の宝物の孫の手を贈ったことが物語られている。そしてこれも姥皮の変種の一つであることがまったく明瞭な、この孫の手には、他の話でこれと同種の宝である蛙の皮などについて言われているのとは、ちょうど正反対に、それで肌をなでるとたちまち非常な美女になれる力があったと言われている。その上またこの孫の手にもやはり、前の話の宝蓑や、その前に触れた長岡の昔話に出てくる「いもくし蛙の皮」などとまったく同様に、望むものを何でも出してくれる力もあったことになっている。

婆さんがね、山へ行きましたと。ほうしたら、大きな蛇が蛙呑みましたてね。ほしたら、婆さんが、蛇に、「その蛙放せ、娘の子くれるすけ」ってって言いましたと。そしてたらその蛇が、蛙を放して、それでお婆さんがうちへ帰ってきて、「まあ、頭が痛い」ってって寝てたら、娘が、「どうした」ったら、「お前、嫌でも蛇のどこへ嫁に行ってくれ」ってって言いましたと。「まあー、蛇のどこへ嫁に行くなんたって、やだ」って言うども、婆さんが頼むすけに、まあ

娘が、「はい」ってって承知したら、「何でもいらんども、ほかの持って行くものは何にもいらんが、その、桐の箪笥のニカワづけにして、そして、その中へヒョウタンいっぺえ詰めてくれ」と、その箪笥にね。そしてその、「ヒョウタン詰めてくれ」ってって、箪笥いっぺえにヒョウタン詰めてもらって、それでその池の大蛇であったすけ、池のほとりへ送ってもらいましたと。そしたら、あの、その大蛇が出て来て、「まあ、入ってくれ」と言うので、「お前、この箪笥をみんな埋めてくれれば、お前の嫁になるし、この箪笥が埋まらんけりゃ、まあ、因縁がねえと思って、あきらめてくれ」とこう言いましたと。そうすると、その箪笥を埋めようと思ったって、桐箪笥のニカワづけでしょうね。それに、ヒョウタンいっぺえ詰めたんだんが、埋めようと思えば浮き、そのうちに、みんなバラバラになっちまって、池がいっぱいにヒョウタンになっちまって、さあ、そのヒョウタンも埋めらんねえし、箪笥もこわれて埋まらんし、あきらめて、そして、その娘は、うちへは帰らんねえし、まあ、山を越えて行ったら、その、草原の中に、明かりがとぼれて、チラチラと明かりが見えて、そして行って、「今晩わ、泊めてくれ」ったら、お婆さんが出て来て、「さあ泊まってくれ」ってって、いろいろ話したら、「お前はおれの恩返しだすけ、今日はおれが恩返しだすけ助けてやる」って、婆さんが泊めてくって明日朝、明るうなって出るどき、「これがその、マゴの手で、お前が身体なぜれば、きれえな女になるし、欲しいもんが欲しけりゃ出てくるすけ」って、それもらって出て、そしたらその、「女中が欲しい」っていう看板が出ていたすけに、そこへまあ行きましたと。「女中に使って欲しい」ってって。そして行きましたら、そこで女中に使ってもらって、夜になると、女中部屋へ入ると、身体それでなでつけ、きれえな女になって、それだすけ、若旦那が惚れちまって、そしてみそめて、嫁さんが決まったども、「いらん」て言うし、うちの親衆は切ながって、「それじゃ困る」ってので、真綿を、八畳間いっぱいに、真綿もんで敷いて、そして、「そこへまあ転がって、真綿の付かんのを、うちの嫁にしるすけ」って言って、するとその女中がそうして、マゴの手でなでて、その真綿の上転がったすけに、その真綿が付かんで、そしてあのー、あれですと、そこの嫁さんにしてもらいましたと。それでいきはひっさけた。

「姥皮」の昔話の中にはこのように、もともとは山姥自身の皮に他ならず、つまり山姥の身体の一部分であったことが明らかだと思える、姥皮やその変種と目せる宝物に、それを使うことで、山姥がする通りに老婆にも美女にも自在に姿が変えられるだけでなく、欲しいものを何でも出してくれる不思議な産出力もあったことを、物話っている話が見つかる。その場合には、本体から離れたその一部分に過ぎぬ皮にもなお、このような力があったことを語ることで、それらの昔話は、山姥の身体にどんな宝でも無尽に排出する旺盛な産出力が、まさに横溢している筈であることを、はっきり示唆していると思える。

(3)死体からの財宝や作物の発生

このように生きた身体からも、大便や乳として排出したり、あるいはまるで垢のように皮から出すなど、いろいろなやり方で、ありとあらゆる物を無尽蔵に出す力を持っていることを語られてきた山姥はまた、これも多くの昔話の中で、死ぬとその死体からも、金銀財宝とかさまざまなよいものが生じたことを物語られている。このことを物語っている話はまず、これも全国的に流布している著名な昔話の一つである、「牛方山姥」の型に属する話の中に数多く見つかる。栃木県塩谷郡で

語られたという次の話も、その一つである。(13)

彦四郎という人が、馬でもって魚を運んで商いしてた。で、まあ部落ばっかりで、商いしてたんじゃとても商売にならねえから、峠を越して、向こうの部落へ行ってみようと。その峠では、昔は、山ん婆という鬼のばあさんが、いたんだとよ。山んばがいるから、気をつけて行きな、といわれて、それでもおれは男だから、馬引いてかつおをつけてそして行ったんだと。そしたら、みんなのいう通り、山んばが出たんだと。そして「彦四郎、かつお一尾くれ」と言う。そんだからかつお一尾やった。それで一尾やったら、たちまち食べちゃって、また「一尾くれ」と言う。やればまた食べちゃって、また「くれ」と言った。そいでまあ、しまいにゃ面倒になっちゃったから、「馬もかつおもみなやっから、食べちゃえ」言って、自分で逃げて行った。馬もかつおも、やっちゃったんだと。そのうちすぐ食べちゃったんだと。彦四郎ちゅう人は大きな藤のある木の上にのぼって見てたんだと。

そしたら、たちまち、食べちゃって、「彦四郎、どこから上った」とこう言う。「どこから上ったってこの藤つるつたわって、上ったんだ」。「藤つる、じゃ、おれも」。彦四郎を食べるつもりだったんだべ。そいで藤つたわって、上りはじまったから、上からなたでもって、藤つる切り落としたんだ。そしたら山んばが、淵ん中へ落ちた。ま、これじゃ、よかったと思って、そいで来てみたら、火の明りのすっとこあんださ、それが山んばのうちなんだって。トラ子という娘が、いたんだと。「こういう理由で、山んばに藤つる切りおとして、淵へ入れてきたから助けてくれ」そう言って。そうしたら「おお、寒い、トラ子。おお、寒い、トラ子」て帰ってくんだと。

「かつお彦四郎に馬鹿にされて、大淵ん中へ落とされて、寒くて寒くてしょうがねぇ。早く火を燃して、やってくれ」。だから彦四郎、今度は木の上さ、逃げて隠れていた。帰って来て木の下で、火燃してあたっていながら「お前、何食べったが」。「もちでも焼いて、食べんべ」。もち焼いてあったから、寒くてしゃあねぇって、火の上けつのっけて「背中、焼きして焼いて。背中、焼きして焼いて」っと、いいかんやっけど、上から彦四郎少しと思ってとって、なんだかこうもぐもぐして、ほど虫でも食っちゃったんだか。ないってわけだって。それで今度、こっち向いて、焼いて食べちゃう。そして焼いて食べて「今晩は、ばあちゃんは、なにしゃねる。石のからどってねどこのことだんべえ、石のからどに寝るか、木のからどに寝るか」って言った。「今夜、寒いから、木のからどに寝べ」て、そして木のからどに寝たと。

そしたら、ええかげんに寝たころ、彦四郎が上からおりてきて、箱、釘付けにしちゃった。そして、お湯わかして、そして錐もんでそして、「なんだか今晩は、きりきり虫が鳴く」なんて言やった。山んばが「きりきり虫や鳴く。きりきり虫や鳴く」。じゃ、そうしてるうちに、お湯が煮たったから、お湯をかけた。ま、はじまりは、あんまり熱くなかったんだんべぇ。そしてだんだん煮たったお湯かけられて、熱くなって、あ、今度は彦四郎だ、と思った。「彦四郎、かつおも馬も返すから、助けてくれろ、助けてくれろ」て言った。「何、このくそばばあ、かつおも馬も食っちゃって、そいで、返すはあるもんじゃない」。そいで、お湯かけちゃった。じゃ、しまいに音がなくなっちゃったから、おいたんだって。朝になって、ふたとってみたんだって。そしたら、みんな小判になってたんだって。みんなそれが。それで、かづ（かつお）馬、返したわけだんべ。それで。そいで、トラ子という娘と一緒になって、そこで暮らしたという。

この「牛方山姥」の昔話ではこのように、牛方または馬子が、牛あるいは馬の背に魚など食物の

荷を積んで、山を越えようとしていると、山姥が出てきて、荷物の食物を次々に「くれ」と要求しては、もらって食べ、しまいには牛あるいは馬まで、食べてしまう。牛方あるいは馬子は、そのあいだに逃げて行って一軒の家を見つけ、その天井裏などに上がって隠れていると、そこは山姥の家で、やがて山姥が帰って来て、餅を焼いて食べようとするが、多くの話ではその餅を牛方あるいは馬子が竹槍などを使って上から取って食べてしまう。それで餅を食べるのをあきらめて山姥は、釜であるとか風呂桶あるいは櫃などの中に入って寝てしまう。そこで牛方あるいは馬子は、山姥が熟睡したところに下りて行って、釜や桶に蓋をした上から重石を置いたり、櫃を釘付けにするなどしておいて、火を燃やし続けあるいは熱湯をかけて、山姥を焼き殺すかまたは煮殺す。そうするといくつかの話では、翌朝になって蓋を取ってみると山姥の死骸が、この栃木の昔話のように沢山の「小判」つまり金貨に変わっていたとか、「銀貨」(14)、「銭」(15)あるいは、「白銀、黄金の山」(16)などの財宝になっていたと物語られている。山姥の死骸が、「万病の薬」(17)とか、「ほうそうの妙薬」(18)、あるいは高価な「杉やに」(19)とか「松やに」(20)になっていて、牛方あるいは馬子がそれを売って、「大金持」とか「長者」、「分限者」になったと物語っている話もある。

いくつかの話では山姥の死骸から、財宝ではなく畑に植えられる作物が発生したことになっている。宮城県栗原郡で語られた話は、人参の起源譚になっていて、その結末には馬方から奪い取った大量の米を、大釜で炊いて食べ尽したあとで、山姥がその同じ釜で風呂を沸かして入ったところを、馬方に蓋をされて火を燃やし続けられて殺される。そうすると、その死骸から沢山の人参が生えて、それがこの作物の嚆矢となったことが、こう物語られている。(21)

「ああ、腹コくっづくなった。風呂でも沸かして入っぺがな」て独り言いいながら、その釜でお湯を沸かして入ったど。馬方はよし、こんどきだ、と思って、そうっと下りで、

「ああ、いいお湯だ。いいお湯だ」て言ってる後ろから、いきなり（急に）蓋をして、その上さ碾き臼を載っけだど。ほうして、のんのんと二日も火を焚き続けたど。三日目になって、おっかなびっくり蓋を取ってみたら、真っ赤などろどろとしたものがあったど。馬方は気持ち悪くなって、畑さなげだど。

それから何日かして、馬方が馬っこを引いて、その畑さ行ってみたら、根っこの赤え物がいっぺえおがって（生えて）たど。馬っこは手綱を振り切って、畑さ駆けこんで、「ヒヒーン、ヒヒーン」て鳴きながら、夢中で食っだど。それから馬っこはうんと力が出たど。これが今の人参の始まりだとしゃ。この話は、こんでおひらき、おひらき。

いくつかの話では、釜の中で焼き殺された山姥の死骸が、蓋を取ってみると、すっかり溶けて一ぱいの真赤な血になっていて、それを畑などに捨てたところが、その血に染まってこのときから、ソバの根(22)であるとかトウモロコシの茎(23)などが、赤くなったのだと物語られているれている。これとそっくりな事件は、これも全国的に流布している昔話の一つの「天道さん金の鎖」の多くの話の結末にも出てくる。この昔話の代表として柳田国男が『日本の昔話』に収めたのは、熊本県天草郡の次のような話である。(24)

昔々ある村に、母と三人の子とが住んでおりました。母が三人の子に留守番をさせて、寺参りに出かけた後で、山姥が母に化けて帰って来ました。山姥の手はさわって見ると直ぐにわかるのですが、子供をだますつもりで芋がらを巻いて来たので、子供は母の手だと思って戸を開けて中へ入れました。山姥は三人の子の一番小さいのを抱いて、奥の間に入って寝ました。そうしてがりがりとその子を食べてしまいました。次の間に寝ていた二人の子はその音を聞いて何を食べているのかと山姥の母に尋ねますと、小さな一本の指を奥の間から投げてよこしまし

た。それを見ると直ぐに山姥だということがわかって、二人の大きな子は逃げて出る相談をしました。最初に二番目の子が便所に行くと言いますと、山姥が兄の方に戸を開けてやれと言いました。それで二人は家の外に出て、井戸端の桃の木に鉈で切り目をつけて、それを伝って木の上に登りました。山姥は後を追っかけて方々を探しているうちに、井戸を覗いて見たので桃の木の上にいる子が見つかりました。どうしてその木に登ったかと山姥が尋ねます。鬢つけ油を塗って登ったと、頭の児がうそをつきました。山姥は鬢つけを持って来て桃の木に塗りますと、つるつると滑ってどうしても登ることが出来ません。二番目の子がそれを見て笑って、鬢つけ油を付けて登れるものか、鉈で切り目を付けて登るのだと言いました。山姥はそれを聞いて、鉈で切り目をつけて登って来ます。二人の子は困ってしまって、空を見上げて、天道さん金ん綱と大きな声で呼びますと、がらがらと音がして天から鉄の鎖が下って来ました。それにつかまって子供たちは天に登りました。山姥もその後から、同じようにどなりましたが、今度は天から腐れ縄が下って来て、それをつかまえて登ろうとした山姥は、高い所から落ちて来て蕎麦畑の中で、石に頭を打ち割って死んでしまいました。蕎麦の茎はその山姥の血に染まって、その時からあのように真赤になったのだそうであります。

この「天道さん金の鎖」の昔話については、すでに大林太良氏によって、作物の起源神話としての性質が認められるという指摘がされている。大林氏はそのことをこう的確に約言された。(25)

山姥が死に、その血によって現在のような蕎麦が発生した。そう言いかえてみればはっきりするように、この昔話は、死体化生型の作物起源神話につらなる性格をもっている。

この指摘は言うまでもなく、結末にこれとそっくりの事件を物語っている「牛方山姥」の話にも、また他の昔話にも、そのまま当て嵌めることができる。山口県阿武郡の次のような昔話も、その一つである。(26)

山姥が毎日里へ出て村人をだまして捕っては食っていた。とうとう生けどりされて、首を鉈で打ち落とされる。そのころちょうど蕎麦の花盛りで、その血が蕎麦の茎を赤くそめたので今も蕎麦の茎は赤い。

(4)記紀神話および縄文時代の土偶や土器との符合

死体から畑や田に植えられる作物が発生したことを物語っている、大林氏の言われる「死体化生型の作物起源神話」は言うまでもなく、記紀の神話の中にもある。それは『古事記』ではオホゲツヒメ、『日本書紀』ではウケモチまたワクムスヒなど、異名同義的と思えるいろいろな名で呼ばれている神たちを主人公にして語られている話で、『古事記』の神話では、オホゲツヒメがスサノヲによって殺されると、その死体の各所から五穀と蚕が発生したことが、こう言われている。

かれ殺さえましし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。

『日本書紀』のウケモチの神話では、この神がツクヨミによって殺されると、やはりその死体の各所から、右の『古事記』の神話でオホゲツヒメの死体より生じたと語られているのと同じものと、その外にさらに牛、馬と穀物の稗が発生したと言われていて、そのことがこう書かれている。

是の時に、保食神、実に已に死れり。唯し其の神の頂に、牛馬化為る有り。顱の上に粟生れり。眉の上に蠶生れり。眼の中に稗生れり。腹の中に稲生れり。陰に麦及び大小豆生れり。

またワクムスヒの神話には、この神が殺されたという事件は語られていないが、その身体から五

穀と蚕、それに桑の木が生じたことが、こう記されている。

　此の神の頭の上に、蚕と桑と生れり。臍の中に五穀生れり。

つまり大林氏の言われる「死体化生型の作物起源神話につらなる性格」が認められることで、山姥を主人公とする多くの昔話には明らかに、これらの記紀の神話と吻合するところがあると思われるわけで、そのことを大林氏は保食神ウケモチの神話との吻合を特に重要視されながら、こう約言されている。(27)

保食神もまさに殺されることによって、作物を発生させた農耕神であった。その点においては、≪天道さん金の綱≫の山姥と軌を一にしている。

ところでこれらの記紀の神話の中で、オホゲツヒメとウケモチについてはまた、これらの神たちが生きていたあいだにも、オホゲツヒメは鼻と口と尻から出し、ウケモチは口から吐き出すという、排泄物や分泌物を出すのと同じやり方で、自分の身体からさまざまな美味しい御馳走をいくらでも出せたことが語られている。オホゲツヒメは、自分のところにやって来て食物を求めたスサノヲに、このやり方で御馳走を出して、食べさせようとした。そうするとそのやり方を覗き見していたスサノヲが、汚ないものを自分に食べさせようとしていると思い、怒ってこの女神を殺してしまったとされていて、そのことが『古事記』に、こう書かれている。

　また食物を大気都比売の神に乞ひたまひき。ここに大気都比売、鼻口また尻より、種々の味物を取り出でて、種々作り具へて進る時に、速須佐の男の命、その態を立ち伺ひて、穢汚くして奉るとおもほして、その大宜津比売の神を殺したまひき。

これと同様にウケモチも、アマテラスに派遣されてツクヨミが自分のところに訪ねてくると、口から御飯や魚や鳥、獣などさまざまな御馳走を吐き出し、それを大きな台の上にどっさり盛り上げて食べさせようとした。そうするとそれを見ていたツクヨミがやはり、「口から吐き出したものを自分に食べさせるとは、何という汚ないことをするのか」と言って、顔色を変えて激怒し、剣を抜いてウケモチを斬殺してしまったとされており、そのことが『日本書紀』にこう書かれている。

　月夜見尊、勅を受けて降ります。已に保食神の許に到りたまふ。保食神、乃ち首を廻して国に嚮ひしかば、口より飯出づ。又海に嚮ひしかば、鰭の廣、鰭の狭、亦口より出づ。又山に嚮ひしかば、毛の麁、毛の柔、亦口より出づ。夫の品の物悉に備へて、百机に貯へて饗たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿怒り作色して曰はく、「穢しきかな、鄙しきかな、寧ぞ口より吐れる物を以て、敢へて我に養ふべけむ」とのたまひて、廼ち剣を抜きて撃ち殺しつ。

死体化生型の作物起源神話の主人公であるという点で、すでに大林太良氏によって昔話の山姥との吻合を指摘されている、これらの記紀神話の神たちは、このように生きた身体からあらゆる種類の御馳走を出すことができたとされていることでも、やはり山姥と驚くほどよく似ている。なぜなら山姥もこれまで詳説してきたように、いろいろな昔話の中で、自分の身体から欲しいものを何でも無尽蔵に出す不思議な力を持っていたように、物語られている。そして山姥の場合にも、そのやり方は、大便として出したり、乳房から乳としてしぼり出したり、皮から出すなど、まさに排泄や分泌と同じであったことになっているので、この点でも、鼻と口と尻から出したり、口から吐き出したという、オホゲツヒメやウケモチの御馳走の出し方と、明らかによく一致していると認められるからである。

他所でもすでにたびたび述べてきたように筆者は、大林太良氏の言われる「死体化生型の作物起源神話」にまさにぴったり該当するような神話が、わが国にはすでに縄文時代の中期にはあったと推考している(28)。なぜならこの時期から大量の土偶が作られるようになるが、それらの土偶はすべてが女性像であったと思われ、生殖器を強調したりはっきり妊娠した形に作られているものが多い。

また縄文時代中期の土偶の中には、赤児を抱いたり負っている姿を表わしたものもあるので、母神像であった可能性が強いと考えられる。

ところがその母神像であったと思える土偶は他方でまた、完形で発見されることがほとんどない上に、一所から出た破片を集め、完形に復元できることもほとんどない。このことから当時の人たちが土偶を、わざわざ手間をかけて作っておきながら、すべて最後には壊して、破片を離れた場所に分けて持って行くことをしていたのではないかと想像できる。しかもすでに破片にされてしまった土偶が、甕に入れられたり、住居内に埋められたり、壇の上に置かれたり、石組みで囲まれるなどして、明らかに丁重に葬られるか祭られていたと思えるような状態で、発見されることもある。

新潟県栃尾市栃倉の縄文時代中期の住居址の１つでは、３箇所でこのような取り扱いを破片になった土偶が受けていた。まず直径26センチ、深さ51センチほどの円形に掘られた穴の中に、頭と手足が欠失し胴体だけになった土偶が、垂直に倒立して置かれ、その周囲の穴の壁面には、朱を塗った土器片が飾りのように貼り付けられ、また土器の口縁部の破片が、土偶の支えに置かれていた。次に住居の東壁に接して、上面が磨かれた上に丹が塗られ、側面には黄色に彩色したあとがある、長径23センチ、高さ７センチほどの楕円形の台石が置かれ、その中央に、頭部および腹部以下の欠失した土偶が、仰臥させられていた。またさらに別の場所には、長さ120センチ、高さ50センチほどの土の壇が設けられ、その上に土偶の胸部と右腕が置かれていたと報告されている。[29]

これらのことから、藤森栄一など少数の考古学者は夙から、このような取り扱いを母神像であった土偶に対してすることで、縄文時代の人たちが、豊穣女神的な母神を土偶を壊すことで殺害しては、その死体から作物を生え出させようとする儀礼を実施していたと主張してきた。[30] そしてその儀礼の基礎にはすでに、記紀のオホゲツヒメ、ウケモチ、ワクムスヒなどの神話の古形と見做せるような作物起源神話が存在し、それが当時の人たちの信仰の中心に位置を占めていたと、大胆に推定してきた。

この藤森らの推定が大筋においてまさに肯綮に当たっていたことは、1980年からその翌年にかけてされた、山梨県の東山梨郡勝沼町と東八代郡に跨る釈迦堂遺跡群の調査発掘によって、かなりの程度まで強く裏付けられたのではないかと思われる。[31] なぜならこの遺跡からは、全部で1116点もの他にまったく例のない夥しい数の土偶の破片が出土したにもかかわらず、完形の土偶は１点も発見されなかった。またこれほど多数の破片が得られたにもかかわらず、それらから完形の土偶はただの１点も復元できなかった。

しかもこの発掘と調査に当たられた小野正文氏は、これらの土偶が、氏が「分割塊製作法」と命名された独特な製法で作られていたという、きわめて重要と思える指摘をされている。[32] それは壊されるときに破片になる土偶の部分を、あらかじめ別々の粘土塊から作っておいて、木や竹などの芯を使ってそれらを接合し、その上に化粧粘土を被せ、文様などをつけて仕上げるというやり方で、この「分割塊製作法」はその後の調査によって、他の遺跡から出土した土偶片からも、しばしばはっきり確認できることが明らかになってきている。[33]

土偶は当時の技術でも言うまでもなく、全体を単一の粘土塊からでも、容易に作ることができた。それをわざわざこんな面倒な作り方をした理由は、小野氏自身がいみじくも指摘されたように、あらかじめ破片に分断し易くしておくためだったという以外には、ほとんど考えられない。つまりこれらの釈迦堂の土偶片の様態から、縄文時代の中期の土偶が、破片に壊されることを目的として作られ、作られては壊されることがくり返されていたことが、決定的に明らかになったわけで、それによってこのような儀礼が、当時これほどさかんにくり返された背景にはやはり、藤森らが推定してきたように、この時代にすでに作物の栽培が始まっていて、それらの作物が豊穣女神的地母神の

死体より生えるという信仰と、そのことを物語った死体化生型の作物起源神神話が存在していた可能性が、きわめて濃厚になったと思える。そのことを筆者は、釈迦堂の土偶がはじめて一般に公開された特別展の会場に、パネルで展示された「土偶とは何か」と題する短文では、次のように約言してみた。(34)

土偶はなぜ、壊れて出土するのだろうか。日本神話には、オホゲツヒメという女神が殺され、死体のいろいろな部分から五穀などが発生したという話がある。土偶をわざわざ壊すことによって、縄文時代の人びとは、女神を殺しその身体から作物を生み出させようとしていたのだろうか。もしそうなら、土偶が造られ壊された時代にはすでに、作物の栽培が、当時の人びとの生活にとって、かなり重要な意味を持っていたことにになる。縄文時代の全体を、狩猟と採集の文化段階だったとする見方には、大きな修正が加えられねばならぬことになるわけだ。

このように作物がその死体から生え出ると信じられ、それ故に儀礼の中でおそらく毎年くり返し身体を分断されて殺されねばならぬと見做されていた、この地母神的豊穣女神を縄文時代の人々は、土偶とはまた別の形でも造形的に表わして崇めていたと思える。なぜなら縄文時代中期に作られた深鉢形の土器の中には、胴部に大きく膨れた部分があり、口縁部に土偶の顔とよく似た人面を表わした飾りの付けられたものがある。これらの「人面把手付き深鉢」は、全体が腹が大きく脹れて妊娠している女体を思わせるような形状を呈するので、これも藤森栄一らが夙に推定してきたように、母神的女神を表わす意味を持っていたと考えられそうに思える。(35)

もしそうならこの深鉢の中で料理された食物は、女神の身体の中で美味しい御馳走になり、その御馳走を、土器に表わされた女神は、自分の身体から人間のために惜しみなく出してくれることになると思える。これは記紀の神話でオホゲツヒメとウケモチが、自分の身体からさまざまな御馳走をふんだんに出し、やって来るものに気前よく食べさせてやろうとしたと語られているのと、まさにぴったり吻合する。またこの土器から出てくる御馳走が当時の人たちにとってはまさに無上の宝物であったことを考えれば、山姥が昔話の中で、やはり自分の身体からさまざまな宝を出したと物語られているのとも、真によく吻合する。

それだけではない。昔話の中で山姥はまた、頭の天辺に大きな口を持っていて、そこから大量の食物でも、また時には糸のような食べられぬものでも、あっというまに身体の中に呑みこんでしまうとも、物語られている。これも深鉢形の土器が言うまでもなく、まさに天辺に大きく開いた口を持っていて、そこから大量の食物などが土器の体内に入れられたのと、真によく吻合すると思える。また特に大形の深鉢は当然、食物だけでなくその他の価値あるものを貯蔵しておくためにも用いられたと思えるので、その場合にはその土器に表わされた女神は、天辺に開いた口から財宝などまで呑みこみ、またその財宝を人間のために自分の身体の中から出してくれることになると思われる。

また前掲した昔話の一つの中で山姥は、巨大な乳房を持っていて、そこから奇跡的に頑丈な糸を、シューッといくらでもしぼり出したことを物語られていたが、長崎県下県郡（対馬）の伝説には、このような山姥の乳房の巨大さとその不気味な力とを、いっそう印象的に物語っているように感じられる、こんな話もある。(36)

昔、佐須村の椎根に、むしろうちという所があった。そこへ姉と妹が、むしろ打ちに行っていると、山姥が出て来て、寒い寒いと言って、大きな乳を焚火で暖め始めた。そうして、乳を大きくふくらますと姉の方をその拡がった乳の中にからまいて、山の方に取って行ってしまった。数日後、妹は姉の仇討ちに出かけた。その時に浜ぐろう石を持って行った。そうしてその石を火の中にくべて焼いているところへ、また山姥が出て来た。そうして乳を火に暖め始めた。

妹は、山姥の乳房の拡がった時に、焼石を投げ込んでやると山姥はたちまちその石をからまいて、おいたよ、おいたよと言いながら、山の方へ行ってしまった。それが今の大板という所で、それから山姥は、今のしとみという所で、しとめられ、経塚のところに塚をきめ、若田で別れられたからそこを若田というそうです。

このように絶大な力のある乳房を持つと言い伝えられてきているという点でも、山姥の性質には、縄文時代に土偶や土器によって崇められていたと思われる母神的女神と明らかに符合するところが見られる。なぜなら縄文時代の土偶にも、乳房をはっきり強調的に表現したものが数多くあり、その中には明らかに異常と言えるほど大きな乳房を持っているものもあるからである。

またこれも縄文時代中期に作られ、おそらく酒造具として使われ、聖器としての意味を持っていたと推定されている、有孔鍔付き土器には、蛙を表わしたと思われる文様の付けられたものが多く、中には土器の全体が蛙を表わしているように見えるものもある。(37) そしてその蛙の文様にまた、土器の顔とよく似た人間の顔と、円く盛り上がった双の乳が付いたものもあるので、その場合にはこの文様はまさに、人間の女性とも蛙ともつかぬ異様な姿に見える。

このことから縄文時代の人たちにより土器に表されていた女神が、蛙の姿をとることもあると、信じられていたことが窺えそうに思える。そしてもしそうならこの縄文宗教の母神的女神は、この点でも、山姥が前掲した昔話の「姥皮」の中では、実は山姥自身の皮に他ならぬのではないかと思える不思議な蛙の皮を、大切な宝物として持っている上に、自身が時には実際に蛙の姿になることもあるように物語られていたのと、本当にびっくりするほどよく吻合することになるわけだ。

昔話や伝説の中で語られてきた山姥のさまざまな性質には、このように一方では、記紀の神話に出てくるオホゲツヒメ、ウケモチ、ワクムスヒらともよく一致したところが見られ、それと同時に他方で縄文時代に土偶や土器に表わされ崇められていたと思われる母神的女神とは、さらにいっそう多くの点でよく符合すると思える。つまり、縄文時代の中期にすでにわが国で崇められていた豊穣母神の性格が、一方で記紀の神話に出てくる神たちに受け継がれているだけでなく、他方ではまた今日まで民間で語られてきた伝承の中の山姥にも、いろいろな点で驚くほどよく継承されていると思われるわけで、山姥はまさにこの古い母神が民間伝承の中で、有り難い女神から不気味な妖怪に変化したものと言ってもよいと考えられるのだ。(38)

注

(1) 佐々木喜善『聴耳草紙』、筑摩書房、1964年、203頁。
(2) 藤原相之助「昔話の思い出」、『昔話研究』、2巻2号、1936年、9～11頁。
(3) 浅川欽一『奥信濃昔話集』、岩崎美術社、1984年、153～5頁。
(4) 武田明・谷原博信『東讃岐昔話集』、岩崎美術社、1979年、117～8頁。
(5) 土橋里木『甲州昔話集』、岩崎美術社、1975年、108～12頁。
(6) 柳田国男「山の人生」、『定本柳田国男集　4』、筑摩書房、1963年、116頁。
(7) 野村純一『日本伝説大系　11』、みずうみ書房、1984年、175頁。
(8) 佐々木徳夫『陸前昔話集』、岩崎美術社、1978年、141～6頁。
(9) 丸山久子、佐藤良祐『陸奥二戸の昔話』、三弥井書店、1973年、421～4頁。
(10) 水沢謙一『越後宮内昔話集』、岩崎美術社、1977年、161～6頁。
(11) 柳田国男「日本の昔話」、『定本柳田国男集、26』、筑摩書房、1964年、76～8頁。

(12) 真鍋真理子『越後黒姫の昔話』、三弥井書店、1973年、130～2頁。
(13) 稲田浩二、小沢俊夫『日本昔話通観　8』、同朋舎、1986年、231～3頁。
(14) 関敬吾『日本昔話大成　6』、角川書店、1978年、168頁。
(15) 『日本昔話通観　3』、1985年、149頁。
(16) 荒木博之『甑島の昔話』、三弥井書店、1970年、208～11頁。
(17) 『日本昔話通観　4』、1982年、160頁。
(18) 『日本昔語通観　19』、1979年、103～6頁。
(19) 『日本昔話通観　21』、1978年、188～9頁。
(20) 『日本昔話大成　6』、168頁。
(21) 佐々木徳夫『陸前昔話集』、74～6頁。
(22) 渡辺昭五『日本伝説大系　7』、みずうみ書房、1982年、156～7頁。
(23) 礒貝勇『安芸国昔話集』、岩崎美術社、1974年、73～4頁。
(24) 『定本柳田国男集　26』、47～8頁。
(25) 大林太良「生活様式としての焼畑耕作」、同『日本民俗文化大系　5　山民と海人』、小学館、1983年、232頁。
(26) 『日本昔話通観　20』、1979年、275頁。
(27) 大林太良、前掲論文、同所。
(28) 拙著『小さ子とハイヌウェレ』、みすず書房、1976年、8～40頁、『日本神話の源流』、講談社、1976年、50～75頁、『縄文土偶の神話学』、名著刊行会、1986年、『縄文の神話』、青土社、1987年、111～93頁、など。
(29) 江坂輝彌・野口義麿『古代史発掘　3　土偶芸術と信仰』、講談社、1974年、99～100頁。
(30) 藤森栄一『縄文農耕』、学生社、1970年、90～103頁、水野正好『日本の原始美術　5　土偶』、講談社、1979年、54～73頁、など。
(31) 山梨県教育委員会『釈迦堂　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、山梨県埋蔵文化センター調査報告第17、21、22集、』1986～7年。
(32) 山梨県立考古博物館、『第一回特別展、土偶－千の女神が語る縄文時代の祈りとくらし』、1983年、39頁。
(33) 小野正文「土偶の分割塊製作法資料研究(1)－東京都神谷原遺跡の土偶」、『丘陵』、11号、1984年、26～34頁、神保孝造ほか『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』、八尾町教育委員会、1985年、40～1頁、など。
(34) 山梨県立考古博物館『第一回特別展　土偶』、42頁。
(35) 藤森栄一『縄文農耕』、57～69頁、拙著『縄文の神話』、128～9頁。
(36) 鈴木棠三「対馬の昔話（一）」、『旅と伝説』、12巻8号、1939年、20～1頁。
(37) 山梨県立考古博物館『第二回第別展　縄文時代の酒造具－有孔鍔付土器展』、1984年、拙著『縄文の神話』、84～110頁、『日本神話の特色（増補新版）』、青土社、1989年、299～312頁。
(38) このことについてはなお、拙著『妖怪と美女の神話学』、名著刊行会、1989年、を参照されたい。

MOUTAIN WITCH, STORIES IN KOJIKI (『古事記』) AND NIHONSHOKI (『日本書紀』), AND RITUALS IN THE JOMON RERIOD

YOSHIDA Atsuhiko

It is related in Japanese folk tales that the mountain witch has a magical power to excrete or secrete treasure as much as she wants, and that even after death foods and treasures come out from her body. The same power is attributed to the deities of food in the Japanese myths recorded in *Kojiki* (『古事記』) (the Records of Ancient Matters) and *Nihonshoki* (『日本書紀』) (the Chronicles of Japan). A mothergoddess of fertility (a kind of the Mother Earth), from whose dead body foodstuffs grew up, was believed in and represented by clay figurines and earthenwares in the Jomon period (the Japanese neolithic cultural period extending from about 8000 B.C. to about 300 B.C). The mountain witch inherits various characteristics of this Jomon goddess of ferility, and it seems that the goddess was transfigured in folklore into a witch.